［研究ノート］

中井蕉園の「徐長卿伝」について

三瓶　はるみ

はじめに

中国の古代詩のジャンルの中に、「薬名詩」というスタイルの詩がある。薬名詩とは、漢方や民間で用いられる薬草の名を詩中に詠みこんだもので、「雑体詩」（古典詩歌の体裁の一。離合詩、回文詩などがある）のなかの「雑名詩」の一種である。[1] 中国では唐・宋代に盛んに作られ、宋代の詩話にもしばしば登場するこのスタイルは、当時は多くの詩人文人によって作られていた。筆者は中国の薬名詩の調査において、日本にも薬名を織り込んで作られた詩文があることを知り、江戸時代後期の儒学者中井蕉園（一七六七―一八〇三）の漢文作品「徐長卿伝」を知るに到った。「徐長卿伝」は一千字ほどの散文であるが、主人公である徐長卿をはじめ、登場人物すべての名前に漢方の薬草を当て、また文中の名詞や形容詞にも薬草名を用い、その薬草が持つ性質や効能がストーリーに生かされるよう工夫されている。その序文によれば「薬草名を使って作った詩に触発されて、戯れに作ってみた」という。江戸時代の学者では、中井蕉園とほぼ同時代の学者伊沢蘭軒（一七七七―一八二九）が薬名を織り込んだ詩を作ったことが、森鴎外の小説『伊沢蘭軒』に記されている（蘭軒の作品については後述）。蕉園が言う「薬草名を使って作った詩」とは、この「薬名詩」を指すのではないだろうか。蕉園が「薬草名使って作った詩」に触発されて作ったのは、韻文ではなく散文であるが、中国で生まれた薬名詩が、江戸期の儒学者の手でどのようにアレンジされたかを紹介するのは、意義のあることと考える。本稿では「徐長卿伝」の全文を掲載し、現代語訳を付して紹介する。

一

本論に入る前に、まず薬名詩について簡単に触れておく。

薬名詩は中国の六朝期に成立し、唐・宋代に発展した。南宋・王楙の『野客叢書』巻十七「薬名詩」には、その起源と宋代に至るまでのあらましが、次のように記されている。[2]

「西清詩話」云、薬名詩起自陳亜、非也、東漢已有離合體、至唐始著薬名之號、如張籍「答鄱陽客詩」云、「江皋歳暮相逢地、黄葉霜前半夏枝。子夜吟詩向松桂、心中萬時豈君知」是也、僕謂此説亦未深考、不知此體已著於六朝、非起於唐也、當時如王融、梁簡文、元帝、庾肩吾、沈約、竟陵王皆有、至唐而是體盛行、如盧受采、權、張、皮、陸之徒多有之、呉曾「漫録」謂、薬名詩、庾肩吾、沈約亦各有一者、非始於唐、所見亦未廣也、本朝如錢穆父、黄山谷之輩、亦多此作。（『西清詩話』

は、以下のように言う。薬名詩が陳亜[3]に始まると言うのは誤りである。後漢にはすでに「離合体」があり、唐に至って「薬名」と称するようになった。たとえば、張籍の「鄱陽の客に答ふる詩」に、「江皋の歳暮　相逢ふの地、黄葉霜前　半夏の枝。子夜詩を吟じて松桂に向かひ、心中万事豈君の知るらん」とあるのがそれである、と。[4]私はこの説もまた、まだ考察が十分でないと思う。この詩体はすでに六朝期に存在し、唐代に起こったのではないことを知らないのだ。当時、王融、梁の簡文帝、元帝、庾肩吾、沈約、竟陵王にはみな薬名詩があり、唐代に入って流行し、盧受采、権徳輿、張賁、皮日休、陸亀蒙のような多くの人たちにもこの作品がある。呉曽の『漫録』は、薬名詩は庾肩吾や沈約にもそれぞれ一首あり、唐代に始まるものではない、と言っている。しかしこの見解もまだ不十分である。本朝になると、銭穆父や黄山谷など多くの人がこのスタイルの作品を作っている。）

薬名詩の特徴とその歴史的発展について、田中謙二氏は論文「薬名詩の系譜」[5]において、宋代の詩話を手掛かりに薬名詩の歴史をたどり、現存する薬名詩を掲載し、各時代におけるその特徴を詳細に検討している。氏は、薬名詩の言葉のもじり（類似音による仮借）には二種類あることを指摘する。一つは詩文中に織り込まれた薬草名が「意味を転化させながら、原名のまま標記されている」もの。例えば、「伍茄→吾家」、「茱萸→須臾」のように、薬草名はそのまま標記されるが、音の類似性を使って表現するものである。もう一つは薬草名を音通させたり別名を使うなどしてもじる、「それが仮借することば、すなわち転化された意味を示す文字で詠みこまれる」もので、前者とは逆のパターンである。（「陶人→桃仁」、「回郷→茴香」など。）田中氏は、六朝期に発生した薬名詩はその初期において「本草名は薬用の名称どおり標記され、しかも転化された意味は字面から容易に想像しうる程度の技巧にとどまっている。すなわち、言葉のもじりはほとんどまだ発生していない」が、唐代から宋代に至る間に言葉もじりの技巧が顕著になること、もじりが通俗文学や寄席に見られることを示して、「もじりの技巧

は、おそらく庶民を対象とする演芸から得たものであったろう」と指摘し、敦煌文書中の「伍子胥変文」（唐末から五代に成立）と、宋代の陳亜を挙げている。[6]「伍子胥変文」は庶民を対象とした俗文学作品である。戦国時代の伍子胥の仇討ちをモチーフとし、それを発展させた物語であるが、文中に伍子胥が妻と薬草名を織り込んだ詩を用いて問答をするくだりがある。また、宋の陳亜は宋代詩話にしばしば登場し、「生涯に薬名詩を百余首作った」と言われる詩人である。時代が下って元・明代に入ると、薬名詩は戯曲や物語の中に取り込まれ、韻文から散文へと展開してゆく。田中氏は『西廂記』（王実甫）や『陽春白雪』の「中呂・粉蝶児」（孫叔順）などの套数作品について考察し、さらに薬草名を用いた散文についても触れ、清の褚人獲『堅瓠集』（丙集巻二）収載の、薬名を織り込んだ書簡（蘇州の芸妓と情人のやりとり）を挙げている。

田中氏の指摘の他に、明代にはすでに薬名を用いた散文が書かれていたことが、当時の随筆の記述に見ることができる。明・李翊の『戒庵老人漫筆』には、作者不詳の「桑寄生伝」という物語が収録されている。これは桑寄生という人物が反乱軍を平らげる話で、地の文章に薬草名を織り込むほか、間に桑寄生と愛妾が応酬する薬名詩を挿入している。このほか、清代の作品には『聊斎志異』で名高い蒲松齢の作とされる「草木伝」がある。この作品は戯曲であるが、全篇にわたって薬草名が盛り込まれている。六朝から明清に至る間に、薬名詩は韻文から戯曲の歌詞へ、さらに散文へと発展していったのである。

以上が中国における薬名詩の歴史である。次に、日本における薬名詩の記述としては、まず前述の森鴎外の小説『伊沢蘭軒』が挙げられる。『伊沢蘭軒』には、文政十一年五月に蘭軒が薬名詩を作ったことを、次のように記している。

此年文政十一年五月の詩会は酌源堂に於て催された。宿題は「採薬」で、蘭軒は「倣薬名詩体」の五律を作つた。「採薬遇天晴。青籃掛杖行。途平蓬野濶。苔滑石橋横。林薄荷鑱入。池塘洗艸清。吾家間事業。不是学長生。」第一には天精がある。天精は地骨皮の別名である。晴は精と通ずる。第二には藍がある。籃藍は相通である。第三には萍がある。平は萍と通ずる。第四には滑石がある。第五に薄荷がある。第六に蒨草がある。洗蒨は相通である。第七に五加がある。五加と吾家とは音通である。第八に長生がある。長生は羌活の別名である。

蘭軒は本稿で取り上げる「徐長卿伝」の作者・中井蕉園より十歳年下であり、ほぼ同じ時代に生きた人である。蘭軒が薬名詩を作った文政十一年は西暦一八二八年であり、蕉園の死後すでに二十五年がたっている。つまり、「徐長卿伝」と『伊沢蘭軒』の記述は、日本における薬名詩が蕉園存命の期間に知識人たちによって作られ、かつまた蕉園の没後も作られていたことを示しているのである。尚、蕉園の父・中井竹山は漢詩文の造

詣が深く、彼が責任者として運営していた学問所・懐徳堂で漢詩文の講読会を開き、門人たちに勉強させたという。[7] 蕉園も詩会や勉強会を通じて、薬名詩に触れる機会があったと推測される。次に、「徐長卿伝」の作者中井蕉園について紹介する。

二

中井蕉園は、江戸時代後期の明和四年（一七六七）十二月に、中井竹山の四男（第七子）として大坂に生まれた。名は曽弘で、蕉園は字である。また、仙波とも号した。父の中井竹山は当時著名な儒学者であり、幕府認可の学問所「懐徳堂」の学主（教務責任者）であった。「懐徳堂」は大阪の町人たちが創設した、町人のための教育の場であり、朱子学を中心に中国の古典を教授していた。蕉園の父・竹山は「懐徳堂」の発展に力を尽くし、その黄金期を築いた。その弟（蕉園の叔父にあたる）中井履軒は私塾を開いて経学の研究に従事し、多くの著作を残した。蕉園はこうした学問の家系に生まれ、父や叔父の薫陶を受けて育った。特に詩文の才能にすぐれ、頼山陽から「文妖」と評されたという。早読みを得意とし、「七歩二首」（七歩歩くうちに、七言律詩二首を作った）「一宵十賦」（一晩のうちに、与えられた賦題で十の賦を作った）などの逸話を残している。蕉園は父から将来を嘱望されていたが、享和三年（一八〇三）、三十七歳の若さで世を去っている。蕉園の遺稿には「炎窓代睡」（漢詩集）、「騮碧嚢」（紀行文）、「壎集」（漢詩文集）、「蕉園先生著述抄」「蕉園詩巻」「蕉園先生遺稿」などがあり、これらの資料の多くは、現在大阪大学の懐徳堂文庫に収められている。[8] 本稿で紹介する「徐長卿伝」は、蕉園の多くの遺稿と同じように、大阪大学の懐徳堂文庫資料の一部として、同文庫に収蔵されている。湯城吉信氏の「懐徳堂文庫資料解題」[9]は懐徳堂資料の収録状況に関する詳細なデータであるが、それによると、「徐長卿伝」は「蕉園崑山先生文」に収録されており、詳細は次の通りである。

「蕉園崑山先生文」は中井蕉園と三村崑山の漢文集。不分巻、全十六葉の仮綴じの鈔本で、朱筆で句点が施されており、巻末に朱引の引き方や圏点の打ち方に関するメモがある。「徐長卿伝」のほか、「雕蟲篇序」「再答脇子善書」「答尾藤学士書」が収められている。四篇のうち「雕蟲篇序」は、三村崑山が蕉園の「雕蟲篇」（蕉園の「一宵十賦」を収録したもの）のために書いた序文である。崑山は蕉園の叔父・中井履軒の門人で、蕉園より五歳年長の人であった。「再答脇子善書」「答尾藤学士書」は、「雕蟲篇」に関して、蕉園が脇子善及び尾藤学士に送った書簡である。

「雕蟲」とは「篆刻をするような細かい技術」、「取るに足りない技能」を言い、詩文などで言葉を飾り立てたり、技巧に走

ることを指す。湯浅邦弘編著『懐徳堂辞典』「雕蟲篇」の項に、蕉園の、賦を作ることに対する謙遜であろうと言う。[10]「徐長卿伝」が「雕蟲篇」とともに綴じられているのは、「徐長卿伝」の位置付けを示すものとも考えられよう。では、「徐長卿伝」とはどういう作品であるのか。

三

「徐長卿伝」は、徐長卿という名の青年の物語である。医者であった父を同業者の鈎吻（こうふん）に殺され、次いで母を洪水で亡くした徐長卿が、父の仇・鈎吻らによる反乱を鎮圧し、山に入って仙人となるまでを描く。冒頭に短い序文があり、本編執筆のいきさつと、簡単な注意書きが付され、末尾には「論に曰く」として、一篇の総括が述べられている。本文は内容によって五つの段落に分けられる。

序文　：執筆の経緯
第一段：徐長卿の生い立ち
第二段：父の死
第三段：母の死と仇討ちの決意
第四段：賊の討伐軍に参加
第五段：戦闘の様子と賊の鎮圧
第六段：後日談
後書き：物語の総括

「徐長卿伝」の原文、読み下し文、現代語訳及び薬草名の解説を次に掲げる。（薬草名の和名及び解説は、『和漢三才図会』によった。[11]）

【原文】

近歳有取薬名、以作詩者、余亦傚之、戯擬作傳一篇、以附于笑語之後、字之左側朱畫者薬名也　其重出者不復朱畫

【読み下し】

近歳薬名を取り、以て詩を作る者有り、余も亦た之に傚ひ、戯れに擬して傳一篇を作り、以て笑語の後に附さんとす。字の左側に朱畫せる者は薬名也。其の重ねて出づる者は朱畫を復（ふたたび）せず。

【訳】

最近、薬草の名を使って詩を作る者があった。私もまたその例にならい、戯れに伝を一篇作り、笑い話にでもしようと思う。字の左側に朱書きしてあるものは薬草名である。（重複して出現するものには朱書きを省く。）

徐長卿伝

【原文】

徐長卿(1)、字杜仲(2)、瑣陽(3)商陸(4)人、其先出於防風(5)氏、父名三稜(6)以善醫、仕于常山(7)太守、母丁香(8)、夢見一人操巴戟(9)乘紫河車(10)濟上池水、有娠生長卿、有白頭翁(11)、相長卿曰、是児眼如龍珠(12)面如大棗(13)背有黒子、三七(14)成列、少壮必有厄、晩年莫不吉利(15)、及長好學有遠志(16)、受業於黄精(17)先生、旁學兵法、

【読み下し】

徐長卿、字は杜仲、瑣陽・商陸の人なり。其の先は防風氏より出づ。父の名は三稜、醫を善くするを以て、常山太守に仕ふ。母は丁香、夢に一人巴戟を操り紫河車に乗り、池水を濟上するを見て、娠有りて長卿を生む。白頭の翁有り、長卿を相(み)て曰く、是の児眼は龍珠の如く面は大棗の如し、背に黒子有り、三七列を成すは、少壮に必ず厄有り、晩年吉利ならざるは莫し、と。長ずるに及び學を好み遠志有り、業を黄精先生に受け、旁ら兵法を學ぶ。

【訳】

徐長卿は字を杜仲という。瑣陽・商陸の人で、先祖は防風氏の出である。父の名は三稜と言い、優れた医術で常山太守に仕えた。母の丁香は、巴戟を操り、紫河車に乗って川を渡る夢を見て妊娠し、長卿を生んだ。白髪の老人が長卿の人相を見てこう言った。「この子の目は龍の目玉のようだし、顔は大きな棗のように丸い。背に黒子(ほくろ)が三つ、七つと並んでいる。若いころ必ず災厄に遭うが、晩年大吉間違いなしじゃ」と。長卿は成長すると学問を好み、大きな志を抱くようになった。黄精先生に就いて学問を修め、その傍ら兵法を学んだ。

【薬草名】

(1) 徐長卿：スズサイコ。『和漢三才図会』に、「徐長卿とは人名である．いつもこの薬で邪病を治していたので遂に名となった」とある。『本草綱目』では、「鬼物・疫疾・温瘧を治す」とされる。別名を「鬼督郵」というのは、鬼病（神経作乱）を治すことから。

(2) 杜仲：トチュウ。『和漢三才図会』に、「むかし、杜仲という人がこれを服用して仙道を会得した。よってこう名づける」とある。

(3) 瑣陽：薬草名は「鎖陽」。オシャクジタケ。

(4) 商陸：ヤマゴボウ。

(5) 防風：ボウフウ。ここでは薬草名のほかに、古代伝説中の部族「防風氏」になぞらえる。『国語』「魯語」に、「禹が諸侯を集めた際、遅刻したため殺された」とある。

(6) 三稜：ウキヤガラ。

(7) 常山：ジョウザンアジサイ。また、山の名（恒山。五岳の一つ、北岳．漢の武帝の諱を避けて「常山」ともいう）にかける。恒山は古代帝王の巡狩の地とされる。

(8) 丁香：丁子。丁子には雌雄の別があり、雌を「母丁香(ぼていこう)」と

いう。ここでは「母」にかける。

(9) 巴戟：ハゲキテン。

(10) 紫河車：ヒトの胎盤。プラセンタ。ここでは「妊娠」を暗示する。

(11) 白頭翁：ヒロハオキナグサ。

(12) 龍珠：ハダカホオズキ。『本草綱目』に、「これを服すれば白髪を変じて黒くし、老衰を防ぐ」とある。

(13) 大棗：クロウメモドキナツメの果実。

(14) 三七：ヤマウルシ。山漆（さんしつ）。『本草綱目』に、「その葉が左に三枚、右に四枚ついているので三七といわれているが、恐らくそうではないであろう」とある。

(15) 吉利：吉利草。和名不詳。『本草綱目』に、「蠱毒を解するのに霊験がある」とある。

(16) 遠志：イトヒメハギ。

(17) 黄精：ナルコユリ。『和漢三才図会』に『博物志』の黄帝と天老の問答を引いて、黄精を食べると長生きするとある。徐長卿の師が老人であることを意味するか。

【原文】

三稜後以年老致仕、歸商陸、遠近請治者益衆、三稜又有巧思、創意製龍骨(18)車、邑人皆便之、商陸舊有鉤吻(19)者、業醫、自誇以為無及已(20)、比三稜自常山歸来也、業日衰廃、又以其製水車之故、邑人愛戴之也、不勝其憤、誘三稜殺之、滅跡出奔、長卿痛恨無地、然以母病故、不得追覓焉、

【読み下し】

三稜後に年老を以て致仕し、商陸に歸る。遠近の治を請ふ者益ます衆（おほ）し。三稜に又巧思有り、創意して龍骨車を製り、邑人皆之を便とす。商陸に舊（もと）鉤吻なる者有り、醫を業とす。自ら誇り以為（おもへ）らく已に及ぶもの無しと。三稜の常山自り歸来するに比（およ）ぶや、業日に衰廃す。又其の水車を製するの故を以て、邑人之を愛戴するや、其の憤に勝へず、三稜を誘（かどわか）して之を殺し、跡を滅して出奔す。長卿痛恨して地無し。然るに母の病の故を以って、追覓するを得ざるなり。

【訳】

三陵は後に年老いたことを理由に職を辞し、故郷の商陸に帰った。故郷に帰ると診療を願う人々が遠近を問わずやって来て、その数はどんどん増えていった。三陵はまたアイデアマンでもあった。創意工夫して水車を造り、村人に役立てた。さて、商陸にはもともと鉤吻という者がいて、やはり医者を生業としていた。鉤吻は、医療にかけては自分に及ぶ者は無いと自負していた。ところが三陵が常山の職を辞して商陸に帰って来ると、人々はみな三陵の所に行くようになったので、日に日に来院者が減っていった。また、三陵が水車を造ったために村人から敬愛されると、怒り心頭に発して三陵を誘拐して殺し、証

拠を隠滅して逃走した。長卿は無念極まりなかったが、母の病気のために鉤吻を追跡することはできなかった。

【薬草名】

⑱ 龍骨：大型哺乳動物の化石。また、龍骨車は水車の別名。

⑲ 鉤吻：野葛（やかつ）。胡蔓藤（中国南部に分布する植物）の根。若芽は劇毒がある。⑰黄精の項に引いた『博物志』には、黄精に対するものとして鉤吻を挙げ、「食べるとたちどころに死ぬ」という。

⑳ 及巳：ヒトリシズカ。

㉑ 天麻：オニノヤガラ。赤箭（せきせん）ともいう。

【原文】

天麻㉑中、連日大雨如覆盆㉒、江流汎濫、中夜水暴至、漂没其屋、長卿驟起、視母則無矣、仰天嘆曰、噫天何使君子㉓至於斯極乎、適遭蘇木㉔流来、乃附此達岸、得以獨活㉕矣、然知母㉖溺死、悲惋弗已、権寓密陀僧㉗寺月餘、一日閲天南星㉘志、得胡黄連㉙復父讐之事、慨然奮曰、母之死天也、悔之何益、父之讐其可忘乎、遂去覓鉤吻、

【読み下し】

天麻中、連日の大雨盆を覆すが如し。江流汎濫して、中夜水暴（にわ）かに至り、其の屋を漂没す。長卿驟（にわか）に起きて、母を視れば則ち無し。天を仰ぎ嘆じて曰く、噫（ああ）天何ぞ君子をして斯の極に至らしめんか、と。適（たま）たま蘇木の流れ来たるに遭ひ、乃ち此れに附して岸に達し、以て獨り活くるを得たり。然れども母の溺死を知り、悲惋して已まず。権（かり）に密陀僧の寺に寓すること月餘、一日天南星の志を閲て、胡黄連の父の讐を復するの事を得。慨然して奮ひて曰く、母の死は天也、之を悔ひて何の益かあらん、父の讐は其れ忘る可きか、と。遂に去りて鉤吻を覓む。

【訳】

天麻年間に、連日滝のような大雨が降った。川は氾濫し、夜中に突然濁流が押し寄せ、徐長卿の家を呑みこんだ。長卿は跳ね起きて母を捜したが見当たらなかった。長卿は天を仰いで、「ああ、天はどうして立派な男を打ちのめすのか」と嘆いた。そこへ偶然、木が流れてきたので、それにつかまって川岸にたどり着き、生き延びることができた。母が溺れ死んだことを知った長卿は嘆き悲しんでやまなかった。密陀僧の寺に寓居することひと月余り、長卿はある日、天南星を観察して、胡黄連が父の仇を討ったことを知った。長卿は心を奮い立たせて言った。「母の死は天命なのだから、悔やんでも何の役にも立たない。しかし、父の仇を忘れてはならないのだ」と。そこで寺を去り、鉤吻を求めて旅立った。

【薬草名】

㉓ 使君子：シクンシ。ここでは「君子をして…しむ」の形で

使われる。

(24) 蘇木：蘇芳木。スオウ。ここでは「蘇生」にかけるか。

(25) 獨活：ウド。「独り活きのびる」意に用いられる。

(26) 知母：ハナスゲ。「母の…を知る」の意。

(27) 密陀僧：ミツダソウ。

(28) 天南星：マイズルテンナンショウ。

(29) 胡黄連：コオウレン。

【原文】

會黎蘆(30)烏賊(31)胡蔓(32)、聚黨数千、作乱陥伏霊(33)城、以据焉、朝廷将巴豆(34)往討之、賊崛強不能下、乃使獨用将軍(35)柴胡(36)代之、道出蒲黄(37)、長卿時在蒲黄、聞胡蔓即鈎吻也、鈎吻一名胡蔓　拜伏於其車前(38)、告以其情、請自效焉、胡見其状貌雄偉、異之、乃輿偕焉、

【読み下し】

會黎蘆、烏賊、胡蔓、黨を聚むること数千、乱を作して伏霊城を陥し、以て据る。朝廷巴豆を将とし、往き之を討たしむ。賊崛強にして下すこと能はず。乃ち獨用将軍柴胡をして之に代はらしめ、道蒲黄に出づ。長卿時に蒲黄に在り、胡蔓即ち鈎吻を聞くや（鈎吻は一名胡蔓なり）、其の車前に拜伏して、告ぐるに其の情を以てし、自ら效するを請ふなり。胡其の状貌の雄偉なるを見て、之を異とし、乃ち輿せて偕にするなり、

【訳】

ちょうどその時、黎蘆・烏賊・胡蔓の三人が徒党を組んで数千人を集め、反乱を起こして、伏霊城を攻略して立て籠もった。朝廷は巴豆を将軍として派遣し、反乱軍を討伐しようとしたが、賊は頑強で打ち滅ぼすことができなかった。そこで、代わって独用将軍の柴胡が遣わされた。柴胡は行軍の道中、蒲黄を通りかかった。ちょうどその時、長卿は蒲黄にいて、胡蔓は即ち鈎吻であると聞くや（鈎吻は一名胡蔓）、柴胡将軍の車の前に跪き、身の上を打ち明けて、是非とも胡蔓討伐に加わりたいと願い出た。柴胡将軍は長卿の顔立ちが立派であるのを見て優れた人物に違いないと思い、車に乗せて行を共にした。

【薬草名】

(30) 黎蘆：リロ。エビネ

(31) 烏賊：イカ。

(32) 胡蔓：鈎吻の別名。

(33) 伏霊：ブクリョウ。『本草綱目』に『仙経』を引き、「こぶしほどの大きさのものを身に帯びれば百鬼を滅ぼす」とある。ここでは「鬼霊伏する（賊が立て籠もる）」にかける。

(34) 巴豆：ハズ。巴蜀に産するのでこの名がある。猛毒がある。

(35) 獨用将軍：和名不詳。『本草綱目』に、「毒を解し悪血を破る」とある。

(36) 柴胡：サイコ。
(37) 蒲黄：ガマの花粉。
(38) 車前：オオバコ。ここでは「車の前」にかける。

【原文】

既至則胡自門于天門(39)、長卿與衆士門于麥門(40)、相持経日、長卿請焉曰、願假我兵一萬、則不出三日、當平賊、胡許之、長卿欲激士心、陽為箭書、射於城上、其略曰、方今聖天子、德澤瀉(41)于四海、與民安息(42)、辛夷(43)緑礬(44)莫不来服(45)、来服或作莱服即雛菊子也　汝烏賊敢擾化作逆、嬰孤城以抗吾大師、雖有龍眼(46)酸棗(47)之智、甘遂(48)青礞(49)之勇、安能得保哉、汝其熟慮、當歸(50)順、以圖後策、不然吾有大戟(51)之利如皀角刺(52)、以加女頸耳、胡蔓視書怒曰、乳香(53)書生、何敢無礼之甚、裂書投於城外、號曰、必使烏頭(54)白芫花(55)黒乃有降而已、官軍聞之、皆瞋目、鬪志五倍(56)於前、於是長卿身援桴鼓、冒矢石急進攻之、日夜不息、故緩其一面、城中赤箭(57)已盡、禹餘糧(58)又匱、胡蔓自度不能防已(59)與数百騎、夜棄城脱走、至大黄(60)坂、又遇覆敗、長卿邀撃斬胡蔓首、賊殲、

【読み下し】

既にして至れば則ち胡は自ら天門に門し、長卿は衆士と麥門に門す。相持して日を経て、長卿請ひて曰く、願くは我に兵一萬を假さば、則ち三日を出でずして、當に賊を平ぐべし、と。胡之を許す。長卿士心を激さんと欲して、陽りて箭書を為し、城上に射る。其れ略曰く、方今の聖天子、德澤は四海に瀉ぎ、民に安息を與え、辛夷、緑礬の来服せざるは莫し（来服或ひは莱服に作る、即ち雛菊子也）。汝烏賊は敢て化を擾し逆を作し、孤城に嬰り以て吾が大師に抗ふ。龍眼、酸棗の智、甘遂、青礞の勇有りと雖も、安ぞ能く保つを得んや。汝其れ熟慮して、當に歸順し、以て後策を圖るべし。然らざれば吾に大戟の利、皀角刺の如きもの有りて、以て女の頸に加へんのみ、と。胡蔓書を視て怒りて曰く、乳香の書生、何ぞ敢て無礼の甚しきか、と。書を裂いて城外に投じ、號して曰く、必ず烏頭をして白からしめ芫花を黒からしめん、乃ち降す有るのみ、と。官軍之を聞き、皆目を瞋らし、鬪志前より五倍す。是に於て長卿身ら桴鼓を援り、矢石を冒し急進して之を攻め、日夜息まざるも、故に其の一面を緩くす。城中赤箭已に盡き、禹餘糧も又匱く。胡蔓自ら防已する能はざるを度り、数百騎と與に、夜城を棄てて脱走し、大黄坂に至り、又覆敗に遇う。長卿邀撃して胡蔓の首を斬り、賊殲く。

【訳】

賊が立て籠もっている伏霊城に到着すると、柴胡将軍は天門に陣を構え、長卿は大勢の兵士とともに麦門に陣営した。双方にらみ合いを続けること数日、長卿は柴胡将軍に、「どうか私に一万の兵をお貸しください。三日もたたぬ間に賊を掃討して

みせます」と願い出た。柴胡将軍はこの願いを許可した。長卿は兵士の心を鼓舞しようと、わざと矢文を作り、城の中に放った。その内容はだいたい以下のようなものである。「今の聖天子は、その徳は世界の隅々にまでわたっている。民衆は安穏に暮し、辛夷・緑礬などの異民族も、来朝して服従しない者はいない。（「来服」は、「萊服」とも書く。雛菊のことである。）お前たち烏合の賊どもは敢て天子の恵み深い世の中を乱して反逆し、城に立て籠もって我が軍に抵抗している。龍眼・酸棗のような智謀や、甘遂・青礞のような勇猛さがあるといっても、どうしてその身を保つことができようか。お前たち、よくよく考えてみることだ、朝廷に帰順して、今後のことを図った方が身のためだぞ。そうでなければ、私には皀角刺という優れた武器がある。それでお前の首をちょん切ってやるぞ」と。胡蔓はその文書を読むと激怒して「青二才の若造め、無礼千万」と言い、文書を引裂くと城の外に投げ捨て、「必ずや黒白を引っくり返して、打ちのめしてやる」と怒鳴った。官軍の兵士はそれを聞くとみな目を怒らせ、以前に比べて五倍も闘志を燃え上がらせた。そこで徐長卿は自ら陣太鼓を持つと、弓矢・投石をものともせず、昼夜を措かず城を猛攻した。しかし、わざと一方向だけは攻撃の手を緩めておいた。城の中では、刀折れ矢尽き、兵糧も底をついた。胡蔓は防戦しきれないと分かると、もはやこれまでと数百騎（の残党）を従え、夜城を捨てて逃走したが、大黄坂でまた大敗を喫した。長卿はこれを迎え撃ち、胡蔓の首級を挙げて賊を殲滅した。

【薬草名】

(39) 天門：天門冬。クサスギカズラ。
(40) 麥門：麦門冬。ジャノヒゲ。
(41) 澤瀉：サジオモダカ。
(42) 安息：アンソクコウノキの樹脂。
(43) 辛夷：モクレン。
(44) 緑礬：ロウハ。
(45) 来服：本文の自注に「来服或ひは萊服に作る、即ち雛菊子也」とあるが、「萊服」はダイコンのこと。
(46) 龍眼：リュウガン。
(47) 酸棗：サネブトナツメ。
(48) 甘遂：カンズイ。
(49) 青礞：礞石。
(50) 當歸：トウキ。「まさに帰す」の意をかける。
(51) 大戟：タカトウダイ。『本草綱目』「集解」に「別録に曰く」として、「大戟は常山に生じる」とある。「常山」は注(7)を参照。
(52) 皀角刺：トウサイカチの刺。虫を殺す効能があるとされる。
(53) 乳香：香料の名。ここでは、「乳臭い」（青二才）の意。

(54) 烏頭：ウズ。カラトリカブト。ここでは烏が黒いことにかける。

(55) 芫花：フジモドキのつぼみ。花には白、赤、紫がある。

(56) 五倍：ゴバイシ。

(57) 赤箭：オニノヤガラ。（注(21)「天麻」を参照。）ここでは「箭」を「矢」にかける。

(57) 禹餘糧：イシダンゴ。ここでは「餘糧」を「残っている糧食」の意とする。

(59) 防巳：オオツヅラフジの根。「己を防ぐ」意。

(60) 大黄：ダイオウ。瘀血を下す効能を、禍乱を鎮めて太平をもたらすことにかけて「将軍」とも呼ばれる。

【原文】

朝廷大賞胡之功、益封丹参(61)郡、既而胡欲薦長卿於朝、長卿不可、曰、藉君之力、得以復讎、臣之願足矣、去入石膏(62)山、威霊仙人(63)見之喜曰、我預知子(64)之来也、長卿遂従之遊、受辟穀術、自稱蔓荊子(65)、不知所終、後数十年、劉寄奴(66)起零陵(67)之歳、有人見其牽牛(68)過阿魏(69)之市云、此時天下有九仙子(70)、長卿其一也、

【読み下し】

朝廷大いに胡の功を賞し、丹参郡を益封す。既にして胡、長卿を朝に薦めんと欲すれども、長卿可(き)かずして、曰く、君の力を藉りて、以て復讎するを得たり、臣の願いは足れり、と。去りて石膏山に入る。威霊仙人之を見て喜びて曰く、我預め子の来たるを知れり、と。長卿遂に之に従ひて遊び、辟穀の術を受け、自ら蔓荊子と稱す。終わる所を知らず。後数十年、劉寄奴の零陵に起つの歳、有る人其の牛を牽いて阿魏の市を過ぎるを見る、と云(しかい)ふ、此の時天下九仙子有り、長卿は其の一なり、と。

【訳】

朝廷は柴胡将軍の功績を大いに賞賛し、丹参郡を増封した。柴胡将軍は徐長卿を朝廷に推薦しようとしたが、長卿は辞退して言った。「将軍のお力をお借りして父の仇を討つことができ、私の願いは遂げられましたから」と。

長卿は将軍の下を去り、石膏山に入った。威霊仙人は長卿を見ると喜んで、「わしはお前が来ることが分かっていたよ」と言った。長卿は威霊仙人について辟穀の術を習得し、蔓荊子と号した。徐長卿がその後どうなったか、定かではない。数十年後、劉寄奴が零陵で挙兵した年、ある人が、徐長卿が牛を引いて阿魏の市場を通りかかったのを見たということだ。このとき、天下に九人の仙人がおり、徐長卿はその一人であった。

【薬草名】

(61) 丹参：タンジン。

(62) 石膏：セッコウ。

(63) 威霊仙：クガイソウ。『本草綱目』に、性質が激しいので「威」といい、効力がすばらしいので「霊仙」という、とある。

(64) 預知子：ヨチシ。『本草綱目』に、危険を予知するのでこの名がある、という。

(65) 蔓荊子：ハマゴウ。『本草綱目』に、久しく服すれば身を軽くし、老いに耐える」とある。得道して仙人になったことを示す。

(66) 劉寄奴：リュウキド。『南史』「宋武帝紀」に、宋の高祖劉裕（幼名は寄奴）が若いころ、大蛇を射た。翌日、その場所に行ってみると、青衣の童子が薬草を搗いていた。劉裕が尋ねると、童子は「王様が劉寄奴に傷つけられたので、薬を作っているのです」と答えた。劉裕がその薬草を持ちかえると、切り傷にたいへん効果があったので、この草を「劉寄奴」と呼ぶようになったとある。

(67) 零陵：零陵は地名。（現在の広西省）。「零陵香」は、零陵に産する草。古代、お祓いをするときに焚いたという。「薫草」の異名がある。

(68) 牽牛：アサガオ。ここでは「牛を牽く」にかける。

(69) 阿魏：アギ。

(70) 九仙子：和名不詳。一本の草に、根が九個連なって生えることからこの名がある。ここでは「九人の仙人」の意。

【原文】

論曰、巴豆柴胡等、固有蠲邪悪驅毒気之才能、人望所歸、而不能制胡蔓、則不特兇毒之酷、其獷猩亦可見矣、設使當時袖手観望、恣其兇毒、傷攘禁衛之地、侵掠骨髄之疆、勢漸強大、則必将整（＊）鬲先承其惱亂、糧道沮絶、府藏空竭、瀕於危亡矣、夫長卿之志、未楽従于刀圭之間者、而能夷滅彼之速、何也、豈其復讎之念深、而才能又絶類與、抑天之未喪斯民也、

（＊）この字、不鮮明により正確な字は不明。次の「鬲」は古代の釜であり、文脈及び字形の似ているものから考え、便宜的に「整」と読んだ。

【読み下し】

論に曰く、巴豆・柴胡等、固より邪悪を蠲（のぞ）き毒気を驅るの才能有り、人望の歸する所なり、而して胡蔓を制する能はざれば、則ち特（ただ）兇毒の酷のみならず、其の獷猩も亦た見る可きなり。設（も）し當時袖手観望して、其の兇毒を恣にせしめ、禁衛の地を傷攘し、骨髄の疆を侵掠し、勢い漸く強大ならしめば、則ち必ず将に整鬲先ず其の惱亂を承け、糧道沮絶し、府藏空竭し、危亡に瀕するなり。夫れ長卿の志、未だ刀圭の間に従ふを楽しまざる者にして、能く彼を夷滅することの速（すみやか）なるは、何ぞや。豈に其の復讎の念深く、而して才能も又類を絶するか、抑（そも）そも天の未だ斯の民を喪（ほろ）ぼさざるか。

【訳】

論じていわく、巴豆・柴胡といった将軍は、もともと邪悪な者を退治し、その害を除く能力があり、人望が厚いのである。それにも拘らず、胡蔓を討伐できなかったことから、胡蔓の害の深刻さだけでなく、その狂暴のほどがうかがえるのである。もしあの時、手をこまねいて傍観していれば、賊はのさばって都を蹂躙し、我が国の領土を侵略し、その勢力を増大させることになったであろう。そうなればまず食糧が打撃を受ける。食糧の輸送ルートは断絶し、政府の食糧庫は空になり、国家が存亡に瀕するところであった。徐長卿が、医者になることに満足しないのに、兇悪な賊をかくも速やかに退治することができたのは、どうしてだろうか。彼の復讐の念が強く、かつまた比類無い能力を有していたからであろうか。そもそも、天が国を滅ぼそうとしなかったからなのであろうか。

四

以上が、「徐長卿伝」の内容である。文中には、七十種に及ぶ薬草が人名、地名、名詞、熟語などの形で用いられている。人名には、人名そのものを冠した薬草名を付し、悪役には劇毒を有する植物を、それを退治する将軍には解毒作用のある薬草を、また仙人には効能のすぐれた薬草を配し、その薬草の持つ性質や効果によって、登場人物の性格が察しられる仕組みになっている。薬草名は人名や地名だけでなく、「及巳」（己に及ぶ）、「使君子」（君子をして…せしむ）、「独活」（独り活きる）、「知母」（母の…を知る）、「当帰」（当に帰るべし）、「預知子」（子の…を予知す）、「牽牛」（牛を牽く）など、動詞や熟語としても用いられており、その場の状況を掛詞によって見事に表現している。その分類は次の通りである。

（一）人名：徐長卿（主人公）、杜仲（徐長卿の字）、蔓荊子（徐長卿の号）、防風（徐長卿の先祖の氏族名）、三陵（徐長卿の父）、丁香（徐長卿の母）、鈎吻（徐長卿の仇）、黎蘆・烏賊・胡蔓（賊の名）、巴豆・柴胡（将軍の名）、黄精・威霊仙（仙人の名）、白頭翁、胡黄連、龍眼、酸棗、甘遂、青礞、劉寄奴

（二）名詞

地名：瑣陽、商陸、常山、蒲黄、天門、麥門、大黄、丹参、石膏（山名）、零陵、阿魏

物名：巴戟・大戟・皂角刺・赤箭（武器）、紫河車、龍珠、大棗、龍骨、蘇木、密陀僧、天南星、伏霊、烏頭、莞花、禹餘糧、

異民族：辛夷、緑礬

（三）動詞や熟語など：吉利、遠志、及巳、覆盆、使君子、獨

活、知母、車前、澤瀉、安息、来服、當歸、乳香、五倍（子）、防巳、預知子、牽牛

（四）その他：三七、天麻、獨用将軍、九仙子

割合を見ると、人名が二十一、地名が十一、物名が十五、異民族名が二、動詞や熟語などが十七、その他が四となっている。注意すべき点は、これらの薬草は原名のまま標記され、薬草名による言葉の仮借が行なわれていることである。これを前出の伊沢蘭軒の薬名詩と比較すると、次のようになる。蘭軒詩は「採薬遇天晴。青籃掛杖行。途平蓬野濶。苔滑石橋横。林薄荷鑱入。池塘洗艸清。吾家間事業。不是学長生」（薬を採りて天の晴るるに遇ひ、青籃 杖に掛けて行く。途平らかにして蓬野濶く、苔滑らかにして石橋横たはる。林薄 鑱を荷ひて入り、池塘 艸を洗って清らかなり。吾家の閒事業、是れ長生を学ぶにあらず）とあり、「天晴→天精（地骨皮）」、「籃→藍」、「平→萍」、「滑石」、「薄荷」、「洗（艸）→蒨（草）」、「吾家→五加」、「長生（羌活の別名）」というように、音通や別名を使って、薬草名を当てる技法が随所に施されており、中国宋代の薬名詩の「仮借された薬草名」を用いるスタイル(12)に類似していることがわかる。蕉園の「徐長卿伝」における薬草名の使用法と、伊沢蘭軒詩のもじりの技法との相違については、今後の課題として取り組むこととして、今は薬草名の扱いに対する両者の違いを指摘するに留めておく。

次に、「徐長卿伝」の主要登場人物に当てられた薬草について、若干の説明を加えたい。

主人公の「徐長卿」は、和名をスズサイコという薬草である。中国の民間伝説によれば、唐の太宗・李世民が狩猟の際に毒蛇に咬まれ、危篤に陥ったのを、民間医の徐長卿が薬草を煎じて治療し、快癒したことから、その薬草を「徐長卿」と呼ぶようになったという。『本草綱目』には、徐長卿は別名を「鬼督郵」といい、「鬼病」（神経作乱）を治すとある(13)。悪人を退治するのに、ふさわしい名前と言えよう。また、字（あざな）の「杜仲」は、「これを服用した人が仙道を会得した」（『和漢三才図会』）とあることから、仇討ちを達成した徐長卿が、後に山に入って仙人になる（九仙子の一人）ことを暗示するものであろう。徐長卿の母の名である「丁香」は丁子という薬草であるが、雌雄の別があり、雌を「母丁香」という。女性らしい名前とともに、母そのものも指している。なお、徐長卿の先祖は「防風」氏とあるが、これは薬草名であるほか、中国古代伝説中の部族名でもある。

父の敵の鈎吻は、野葛（やかつ）ともいう劇毒の植物である。宋の沈括『夢渓筆談』「薬議」に、「鈎吻、本草、一名野葛、主療甚多、注釋者多端、或云可入薬用、或云有大毒、食之殺人。余嘗到閩中、土人以野葛毒人及自殺。或誤食者、但半葉許入口即死、以流水服之、毒尤速、往往投杯已卒矣（鈎吻は『本草』に、野葛

ともいい、いろいろな病の治療に用いられる、とある。諸説があって、薬用にするとも、猛毒だから食べると死ぬともいわれる。私は以前閩（びん）（現在の福建省のあたり）に行ったことがあるが、その土地の人は野葛で人を殺めたり自殺したりしていた。誤って口に入れると、葉の半分でも死んでしまい、水を飲んで毒を消そうとすると逆に毒が早く回って、しばしば水の器を投げ捨てたときには、已に死んでいるのだ）」とあり、その毒性の強さがうかがわれる。人殺しをものともせず、朝廷に反乱を起こす大悪人の名前として、恰好な毒草である。徐長卿を助ける仙人たちの名前も、霊験ある薬草の名前である。徐長卿の人相を見た「白頭翁」は「老人」であることに掛けており、師匠の「黄精先生」は、漢の張良と黄石公の故事を想起させる。功成り名を遂げた徐長卿が、仙道を修行した「威霊仙」は、成分が強力で素晴らしい薬効があるという。なお、第五段の末尾に登場する「劉寄奴」は、南朝宋の高祖劉裕の幼名を冠した薬草である。さらに異民族の名称には「辛夷」「緑礬」のように、「夷（えびす）」「礬（「蛮」と音通）」の語を用いるなど、登場人物の性格を表すにふさわしい薬草が用いられているのである。

蕉園がこのように多くの薬草名を駆使できた理由として、漢籍を理解できる儒者が医者を兼ねることがあったこと（「儒医兼学」[14]）、懐徳堂の初代学主であった三宅石庵は製薬業者であったこと、さらに中井蕉園の曾祖父・中井玄端は播州龍野藩の藩医であったこと、などが挙げられよう。[15] 現存する懐徳堂文庫中の医学関係書籍には次の書籍が含まれる。[16]

『本草綱目』五十二巻図三巻　明李時珍撰　江戸時代刊本

『増訂本草備要』二巻　清汪昂撰　享保十四年　植村藤治郎等刊本

『本草詩箋』十巻　清朱鑰撰　光緒二十五年校刊本

『重修本草綱目啓蒙』小野識博著　梯謙補正　天保十五年京都菱屋吉兵衛等刊本

『重訂本草綱目啓蒙』小野識博口授　問識孝録　井口望之重訂　弘化四年　江戸和泉屋善兵衛等　刊本

『本草図譜』岩崎常正著　文正十一年序　大正五年岩本米太郎　刊本

『本草目録』中井積徳　手抄　写本

今に残る書籍のほとんどが、蕉園死後の年号の刊本であるが、蕉園在世の当時にはすでに『本草綱目』や『本草備要』が出版されており、[17] 蕉園はこうした資料から薬草に関する知識を得ていたものと思われ、本作品中に登場する七十種類の薬草も『本草綱目』に収録されている。

このように、「徐長卿伝」は全文にわたって薬草名を織り込

んだ、言葉遊びのような作品である。しかしこの作品が単なる戯作で終わらないのは、末尾の作者の総括にあろう。国の存亡危急の際に徐長卿が現れて国を救ったのは、天が国を滅ぼそうとしなかったからだ、という考え方に、蕉園の思想の一端が現れているのではないか。江戸後期から末期、日本はロシアほか諸外国からの脅威にさらされていた。蕉園の父・中井竹山は時の老中松平定信に政務について諮問されたという。[18] 蕉園自身にも『杞憂漫言』という、蝦夷地に関する著述があり、国家を憂える思いは強かったと思われる。言葉遊びの文章を綴る中にも、こうした思いが投影されているのではないだろうか。

おわりに

本稿では、今まで紹介されることのなかった、中井蕉園の「徐長卿伝」を現代語訳し、若干の考察を試みることによって、江戸時代の薬名詩（文）の一端をうかがうことができた。中井蕉園は詩文の才にすぐれていたが、言葉遊びも好きだったとみえて、茶器の語呂合わせや、酒器を擬人化した作品が残されているという。[19]「薬草名を使って作った」文章は、こうした蕉園の嗜好に合うものだったと言えよう。今後は中井蕉園の他の作品を分析しつつ、「徐長卿伝」の成立と日本における薬名詩ついて考察を進めたい。

注

（1）薬名詩の起源は六朝時代に遡り、『藝文類聚』巻五十六「雑文部・詩賦」には、梁の簡文帝・元帝・庾肩吾・沈約の薬名詩が収録されている。沈約の作品は題名を「竟陵王の薬名に和し奉る」とあることから、南斉の武帝の子・蕭子良が詠んだ薬名詩に応酬したものであることがわかる。また、宋の厳羽の『滄浪詩話』「詩體」に、「雑体を論ずれば則ち風人、藁砧、五雑俎、兩頭纖纖、迴文、反覆、離合、建徐、字謎、人名、卦名、數名、藥名、州名、有り、又六甲十屬の類、及び藏頭、歇後等の体有り」とあり、「字名、人名、卦名、數名、藥名、州名」の部分には割り注で、「如此き詩は、只だ戯謔を成し、法を為すに足らざる也」として、人名や薬名などを織り込んだ詩は単なる言葉遊びにすぎないとみなしている。

（2）『野客叢書』巻十七（百部叢書集成之十四『稗海』）

（3）宋の詩人。薬名詩を百余首作ったとされる。『宋史』「芸文志」に、陳亜「薬名詩一巻」の記載がある。また、『全宋詞』に薬名詞「生査子」四首が収録され、その作者小伝に「陳亜、字亜之、楊州人。咸平五年進士。歴任於潜令、知越州、潤州、湖州、官至太常少卿。…少孤、長於舅家、受其舅影響、熟諳、藥名、有藥名詩百餘首。」とある。

（4）この詩における薬草名は、「地黄」「枝子（梔子）」「半夏」「桂心」「豈君知（使君子）」である。なお、この詩のタイトルを『全唐詩』巻三八六では「鄱陽の客に答ふる薬名詩」とし、結句を「心中萬事喜君知」に作る。

（5）田中謙二「薬名詩の系譜」（『明清時代の科学技術史』京都大学人文科学研究所　一九七〇年）。南北朝以来の薬名詩の伝承及びその展開を系統的に解説するばかりでなく、作品の実例を挙げ

て丁寧に説明されている。また、参考資料として主だった薬草名とそれが登場する作品がアイウエオ順に掲載されており、貴重な資料である。

（6）前出田中謙二「薬名詩の系譜」。

（7）湯浅邦弘編著『懐徳堂事典』によれば、蕉園の父・竹山は漢詩文に造詣が深く、門人たちに唐宋明代の詩を読ませ、特に音韻に注意を払っていた、とある。懐徳堂では宝暦八年（一七五八）から詩の講会が始まり、漢詩文の実作が行われていたという。（前掲書九一～九二頁。）

（8）「懐徳堂文庫」とは、懐徳堂が収蔵していた古籍や、懐徳堂に関する各種資料の総称である。これらは財団法人懐徳堂記念会が保管していたが、昭和二十四年、一括して大阪大学に寄贈された。「懐徳堂文庫」は大阪大学附属図書館に移転・収蔵され、同大中国哲学研究室の湯浅邦弘教授を中心に、研究が進められている。筆者は二〇〇九年に同大学を訪問した折、「徐長卿伝」の資料を閲覧する機会を得た。本稿では、懐徳堂関連の記事を、湯浅邦弘編著『懐徳堂事典』、湯浅邦弘・武田健二編著『懐徳堂アーカイブ　懐徳堂の歴史を読む』（いずれも大阪大学出版会発行）に拠っている。

（9）「懐徳堂文庫資料解題」【中井蕉園関係】http://www7b.biglobe.ne.jp/~nobu_yuki/kaidai.htm

（10）湯浅邦弘編著『懐徳堂事典』百五十五頁。「彫虫篆刻」とは、漢の揚雄の『揚子法言』「吾子」に見える言葉。「童子彫虫篆刻」（子どものころは文章を飾り立てていた）とある。詩文における、取るに足りない技巧の喩え。

（11）江戸時代中期、大坂の医者、寺島良安の編纂による類書。正徳二年頃の出版。漢方医学方面の記述が詳細であり、薬草名も『本草綱目』の記述を多く引いて解説を加えている。本稿では、『国訳本草綱目』（鈴木真海訳、白井光太郎校注、春陽堂書店）及び『和漢三才図会』（島田勇雄ほか訳注、平凡社東洋文庫）に拠った。

（12）前出田中謙二「薬名詩の系譜」。

（13）項楚『敦煌変文選注』（増訂本）「伍子胥変文」の注に、「徐長卿：薬用植物。相傳徐長卿以此薬治病、故以人名薬。『太平御覧』巻九九一引『本草經』曰：『徐長卿、一名鬼督郵。味辛温。出山谷、治鬼物百靈蠱毒毒疾疫邪氣温鬼、久服強悍輕身、生太山。』」とある。

（14）湯浅邦弘編著『懐徳堂事典』五十九頁。

（15）湯浅邦弘編著『懐徳堂事典』五十九頁及び六十三頁。

（16）WEB 懐徳堂「懐徳堂文庫電子図書目録」（WWW.kaitokudo.jp/mokuroku）

（17）真柳誠『日本版中国本草図録』巻九「中国本草と日本の受容」（中央公論社　一九九三年）によれば、『本草綱目』は江戸初期に日本に伝来し、寛永十四年（一六三七年）に和刻版が出版され、また『本草備要』は、一六八二年頃から流行し、一七一八～一七二九年頃に復刻されているという。

（18）湯浅邦弘編著『懐徳堂事典』百五十八頁から百六十三頁「懐徳堂と政治」。

（19）湯城吉信「懐徳堂文庫資料解題」によれば、「戯撰酒具名姓」「戯撰茶具官銜名姓」などの作品が残されているという。